

【「NPO 食と農」による討論会「放射能汚染問題と向き合い、われら食と農を語る」
(主催:「NPO 食と農」 後援:「財団法人都市化研究公室」)

11年7月11日に、「財団法人日本消費者協会会議室」で開いた討論を公開します。
討論は、宮崎が筆耕し、各人が校正したものです。

放射能の人や環境への影響については、発言者のもつ専門的知識や情報に基づく発言者自身の判断であり、それが絶対と言うものではありません。しかし、率直に発言し合うことを申し合わせての討論会でした。遠まわしなあるいは曖昧な発言では意味がないと全員が考えたからです。そうした討論会であることをご了解の上お読みいただき、ご参考にさせていただければ幸いです。

討論を通して浮上した政府などに対する働きかけをしようという課題については、提言することを含め具体的なアクションに繋げていきたいと考えています。

< 討論者 4 人 >

小若順一 (NPO 食品と暮らしの安全基金代表、市民運動家)

澤登早苗 (恵泉女学園大学人間社会学部 学部長 教授、農学博士)

松下元之 (NPO 食と農監事、デュ・アン漢方SPA経営、薬剤師)

宮崎隆典 (NPO 食と農理事長、ジャーナリスト)



(写真は左列奥、小若さん、時計回りの順に、澤登さん、松下さん、宮崎)

宮崎)今日はお忙しいところ、「NPO 食と農」が企画した討論会にご出席いただき、ありがとうございます。主催者の責任で、私が進行役を務めさせていただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

フクシマ原発事故が収まらず、人災続きだし、もうがっかりです。腹立たしいですね。環境中に放出された放射性物質による広範な放射能汚染が心配です。

農水産物・食品の汚染、農地の土壌汚染などどう向き合っていくか、私達はとても大事な問題と向き合わされることになりました。あと何年・・・でなくてHow many

decades、つまり何十年単位で対応を考えなければならないかもしれません。原発のある福島県の人たちだけの問題ではなく、またその周辺の県の人たちだけの問題でもないことも明らかです。九州や北海道の人たちも少なくとも食品に対してはきちんとした安全対応をしないとイケないでしょう。

そして、そうした直接的な関わりだけでなく、被災地の復興・東北の復興・日本の復興をどうするか、われわれは日本の食と農業をどうするかという大きなテーマと必然的に向き合わなければならなくなりました。

こうした中であって、今日の討論ですが、タイトルを「放射能汚染問題と向き合い、われら食と農を語る」ということにしました。原発事故は食・農の問題以外にも環境問題やエネルギー問題などをわれわれに問いかけていますが、今日は食と農の問題に絞りたいと思います。

今日の鼎談は、主催者である「NPO 食と農」などのホームページで公開します。旧来型の、参加者を会場に集めて行うシンポジウムなどと違って、インターネット時代に合った、ネット公開の新しい形の討論会と位置づけています。だから一層それぞれが思うところをフランクにストレートに語るということで、自由闊達な討論をお願いしたいと思います。

では、まず今回の「フクシマ・クライシス」をどう受け止めているか、そして重要な点は何か、その主要なものについて、自己紹介も含めてご発言していただきたいと思います。総論各論を問わず、問題提起であってもよし具体的内容であってもよしということで。

それを受けて、私なりにテーマを整理させていただきながら議論を深めていきたいと思います。トップバッターは、最近『放射能を防ぐ知恵』という本を三五館から上梓された小若さんをお願いします。

小若) 1週間前に現地取材に行ってきました。原発から30km圏あたりでしたが、それでも線量は極めて高かった。私も一緒に行ったスタッフも目にガラスの粉が入った感じになりました。初めて体験した感覚です。

非常に線量の高い浪江町で、耳のない奇形の兎が1羽生まれていました。土をいただいて帰って検査すると、奇形を出す絶対的なレベルを超えていましたから、放射能のせいと言っていいでしょう。

奇形が生まれる放射線量のところで、少なくとも10万人、おそらく数十万人が被曝しているので、先天異常児が生まれなければよいが、と心配です。

放射線管理区域の条件に相当する所を2時間ぐらいかけて車を走らせましたが、福島は自然は本当にキレイですね。山あり川あり畑ありで、キレイな風景がずっと続きます。

間に小さい山もあって、その山里が全部放射能まみれというわけですから、原発事故は怖いと35年ほど前から言ってきましたが、本当の怖さを実感しました。

私は農薬の問題をやってきました。ポストハーベスト農薬です。アメリカなどで収穫後に使われるポストハーベスト農薬は工場内で噴霧されます。柑橘類や小麦などを長期保存する目的の農薬の問題ですが、それは小さな範囲のことでした。

放射能汚染の問題は少なくとも200キロ圏が問題となるわけで、それらとは広がりも深さもまるで違います。

東京にいて、原発から20km圏内、30km圏内なんて、われわれは話をしています

ね。でも実際に現地へ行き、車でいくつも山を越えて行くと、現実には東京で話をするときとは違うことが分かります。

目に映る山が水田が、隅々まですべて汚染されているわけですよ。凄いことだなと思いました。

放射能の安全性の話をしてします。

そもそも放射能というのは、人工の放射能と自然にある放射能と2つあります。自然にある放射能のうち、例えばカリウム40とか炭素14とかというのは、それを特定の臓器に濃縮する生物はいません。

放射能は特定の臓器に濃縮すると、そこにガンが多発します。だから歴史の中で、そういう生物は死に絶えて、それ以外の生物が生き永らえてきました。宇宙線とか地殻から出る放射能、土を掘ると出てくるラドンガスなどがありますが、そういうものも含めて、自然の放射能でも危険性があるのです。

それに加えて、原発を推進してきた人たちのせいで、人工の放射線が環境に出て、さらに今回の事故で、人工的な放射線を浴びるようになってしまったということです。

この問題に関して、子孫につながる遺伝毒性の話をしてします。

1940年代までに、放射能の実験をショウジョウバエでやって、放射線がどんなに微量でも遺伝的な影響が出るのが突き止められました。ゼロまで一直線で、被害が出ます。

1950年代には、ネズミを使ってやりました。100万匹に近いところからスタートして最終的には700万匹使ってやりました。普通はガンの実験では2000匹ぐらいなので、ケタがまるで違う実験をやったんです。

それで、やっぱり一直線に「0」へ向って、どんなに少なくとも遺伝的な影響が出るということが分かったのです。

それが広島・長崎の被爆者の調査で遺伝的な影響が出ていないということになりました。人には出ない、というのは不思議なことです。

放射能というのは、遺伝子に傷をつけるときは、突き抜けたり、突き飛ばしたりして、「欠失」というタイプの突然変異を起します。

欠失による突然変異を除いて、広島・長崎で被爆者2世を調べていくと、被害は出ていませんでした。それで、人では放射線の遺伝的影響はないということになっているのです。

これは、マウスの遺伝実験で世界一の実績を残されている野村大成・大阪大学名誉教授が話していることです。

放射能が一番怖いのは、日本人の遺伝的な素質が低下していくことです。放射能が環境に出た以上、このことは確定しているわけです。それをできるだけ少なくしていくのが、国政を預かる政治家と、それにかかわる専門家の責任です。ところが、ガンの影響がないという話にすりかえられて、日本人の遺伝的な体質が劣化していくということがまったく語られていないんですよ。

少し前まで集団遺伝学の権威がいたんですが、その人たちがすでに亡くなっていて、そのお弟子も亡くなっているんで、日本にとって一番重要な集団遺伝学の視点はまったく出てきません。

だからボくらみたいな市民団体が訴えているんですが、本来は、為政者が日本人の遺伝的体質を考えるべきで、僕らは自分を守ることを考えるのがいいわけです。

為政者に集団遺伝学の発想がまったくないというのは、日本の悲劇です。私はそう

ガン率が5%高まるという100mSvの5分の1なので、1%高まると見て、150万人なら1500人ぐらいがガンになる危険性があるということになります。それに内部被爆が加味されないといけけないので、危険性はもっと高まります。

1週間前に現地に行ったとき、映画を作った取材班と一緒に行動していたら、田中俊一という、「ごめんなさい」と言った学者の一人で原子力委員会の委員長代理をやった人と出会いました、この人は良心的な学者で、放射能の除染を行っているNHKスペシャルで取り上げられていましたが、この先生が、小学校で除染をやっていたのです。

ボクは防塵マスクをしていましたが、田中先生が私のことを指差して、「マスクはまったく意味がない。4月以降は放射性物質は飛んでないから」と言ったんです。

田中先生は基準以下なら安全という立場だから、そう言ったのでしょうか、でも、それは間違いです。大気中の放射線量は一時より少なくなっていますが、放射性物質はまだ飛んでいるわけです。できるだけ吸い込まないようにしようという発想をしなければいけないのに、まだ飛んでいるのにマスクは不要などと言っていては、子供に被害が出て、また「ごめんなさい」と謝ることになるでしょう。

日本の法律だと、放射線管理区域の条件である0.6mSv/時(3ヶ月で1.3mSv)を越える地域は、人は住んではいけない、入っちゃいけないということです。

そこに住んでいるんですから、せめて子どもと若者だけは、県外に出られるように対策をとる必要があります。

また、人が住んではいけないところで作っている農産物を、他人に食べさせていいという道理はありません。福島農産物はもう食べたくないと多くの人が思っているし、ボクもそう思っています。お気の毒ですが、福島県の東半分では、これから10年以上、農作物はこれまでのようには売れないでしょう。ボクはそう予想します。

その原因をつくったのは、東京電力と国ですから、事故前の価格で農地を国に買い取らせるのを国に認めさせるべきだと思います。それと平行して、売れなかった農産物の補償をさせなければなりません、きちんと。

もともと事故が起こると、国家予算の2倍を超える被害が出ると原子力産業会議は想定していたのです。補正予算が2兆円などというのは冗談のような金額です。

本来なら100兆円を超えるお金を出して補償しなければならないのですが、そうすると国がつぶれるので、政府はケチって出さないようにしているのです。被害者は、躊躇なく裁判を起こして国と東電に損害賠償をさせるべきです。

事故を起こしても、東電も政府もそして産業界も、事故はたいしたことないように見せようという意図がずっと見え隠れしていました。

A = (撮影者・「NPO 食と農」の会員でオブザーバー) 今度の放射能の問題はレントゲンを浴びる時とどう違うんですか？

小若) 胸のCTで6.9μSv(マイクロシーベルト。その1000倍がmSv)ぐらい。リスクはもちろんありますが、医療面のメリットの方が大きいとして、特に規制はありません。

宮崎) CTは局部的に浴びているから問題は少ないとも言われていますね。

小若) 生殖腺に当てないのが医療の原則です。福島県産の農作物ですが、関東では福島県産の農産物を食べようと応援セールをしている生協や共同購入グループが数多くあります。「福島を応援しよう」「安全です」と言って、放射線で汚染された農産物

を若い人、子ども、妊婦にまで食べさせている生協すらあります。そんな農産物を食べて子供や妊婦がさまざまなダメージを受けたら、生協はどうなのでしょう。これは生協の犯罪ということになりますよ。若い人と子供、妊婦には、積極的に福島県産の農作物を食べさせてはいけません。ボクはそう判断しています。できるだけ食べないようにして、それでも知らずに食べてしまうと言うリスクがあって、それは許容するしかないのですから。

宮崎) 原発は関係ないけれど、阪神淡路大震災のときもそうでしたが、被災者を応援しようというのは生協のポリシーというか、生協の精神でもあるわけですが。

小若) 関東の生協の商品は茨城や福島のものも結構多い。生協が扱うその商品が仮に2割もあると、それをやめれば需要を支えきれない。これが5%ぐらいだったら、そこらの商品をまったく扱わなくてもギリギリ行けるだろうけれど。そうした事情も大きくあるのではないかな。私は、生協の基本は、こういう食べ物は食べないで下さいという運動をすることだと思っています。あれもこれもごちゃまぜにははいけません。特に未来の世代にツケを回すようなことは絶対にやってはいけません。

宮崎) 生協の問題というのは、行政がどうすべきかということと根っこは一緒。小若さんのいまの発言は、今日のテーマの最重要ポイントですね。つまり、安全をどう考えるか、安全の基準をどこにおくかという問題で、さしあたっての問題は、現行の暫定基準をどう考えるかということでしょう。いまの暫定基準を早く引き下げて厳しくするという方向へもっていかないといけない。

小若) いまの暫定基準では、セシウムは、飲用水と牛乳は200Bq(ベクレル)/kg、野菜、穀類、肉、魚は500Bq/kgです。この3月20日に、ドイツ放射線防護協会が、日本に提案したのは、子どもと青少年の食事は4Bq/kg以下、成人は8Bq/kg以下です。子供を大事にしようという厳しい数値です。日本の規制はまったくダメですね。

宮崎) ドイツはそうですか。討論を通して、このテーマでわれわれが政府に向けてモノを言わなければならないことが1つははっきりしました。事故からもう4ヶ月も経つんだもの、暫定じゃなく早く基準値をより厳しい基準にすべし、すなわち数値を引き下げるべし、ということです。専門家の意見をしっかり聞いてね。小若さんからもう一点、発ガンの危険プラス遺伝子の問題の指摘がありました。週刊誌などでもその関連の情報は出されていますね。しかし、メディアがどれだけ声高にたくさんモノを言っているかどうかは別にして、真実は何かははっきりさせようという国民の意識が醸成されないといけませんね。そう思います。

次のスピーカーへ行く前に、市民運動家・小若さんに、広く食品問題と取り組んできた足跡を、消費者運動が盛り上がっていた1970年代ぐらいまで遡って振り返っていただけないですかね。要点だけで結構です。

小若) 1970年代初め、遺伝毒性のある合成殺菌料AF2の追放運動(74年に使用禁止になった)をした後、今はエネルギー・エントロピー理論、環境論・文明論で鳴らす反原発派の榎田敦さんと室田武さんを引き合わせて、勉強会のお手伝いを1年間やりました。また、通産省の原子力発電課長を呼んで講演会を開いたときに、NHKの林勝彦さんと知り合いました。林さんはチェルノブイリ原発事故でモンテカルロ国際テレビ祭でゴールデンニフ賞を取り、その後「人体」で世界の賞を総なめにしました。いまその林さんが福島原発事故の映画を作っていて、私はお金集めで協力しています。あれだけ偉くなると、作品の中身には口を出せません。ということで、70年代は日本消費者連盟のスタッフでしたが、ずっと反原発とエネルギー問題をテーマに活

動していました。

88年からポストハーベスト農薬を94年までやって、そのとき、ポストハーベスト農薬は問題ではあっても、人に被害を出していないじゃないかと、よく言われました。結局、残留基準ができて、実情は変わらないまま、運動も立ち消えになって今日までできてしまいました。

宮崎) 小若さんとは、そのポストハーベスト問題であなたが問題提起したしょっぱなからの出会いで、読売の記者だったボクが「ポストハーベストの小若」を真っ先にメディアで売り出した一人でした。この問題を世に知らしめたあなたの功績は大きいし、実情は変わってないと仰るが、厚生行政へも大きなインパクトを与えましたよ。

小若) 現在はダブルスタンダードなのです。残留基準ができて、それ以後、マスコミに取り上げられなくなって、ポストハーベスト問題は終焉しました。そして、原発です。さきほど言いましたが、放射線は確定的に遺伝的な障害を起します。一方、起すかどうか分からないし、安全量(閾値)がある農薬とどっちを優先させるかと言うと、ボクは絶対に放射線を取ります。

宮崎) 榎田さんと室田さんという学者二人を引き合わせたのは、当時の小若さんにとって、また「日本子孫基金」にとって、そして現在の「NPO食品と暮らしの安全基金」にとって、とても大きな意味をもったし、社会的にも評価されるべきで、小若さんの功績は大きいです。ボクはそう思っています。機関誌をもってそれを縦横に活用したこと、そして一方で、ポストハーベストの運動のころから何か問題があれば、その商品や物質の問題性を独自に科学的に分析調査するという手法で、問題の告発をしてきましたね。しかも、その資金を市民のお金で捻出するという手法でやりましたよね。これらの点は、市民運動の手法として実に優れた独創的・戦略的なものでした。結果、食品企業に直接間接に大きな影響を与えてきましたよ。

松下) 奇形ウサギのことですが、もう少し詳しいお話をお聞きしたい。

小若) 1羽だけですが、浪江町津島で4月末に生まれました。ウサギは妊娠期間が30日から40日ぐらいなので、放射線が大量に降った3月20日から3月末の間に受胎して、障害が出たのだと思います。そのころ、飯舘の雑草で250万Bq/kgを記録しています。浪江町は、飯舘より数倍、累積線量が高いので、毛についている放射線がこの数倍だったら、耳をなくす奇形ができる線量になります。奇形は1羽ですが、人間も同じリスクがあると思うべきで、被害が出るのかどうかを注目しています。

宮崎) ウサギの奇形と放射能の影響との間の因果関係は、断定はできないのではありませんか。遺伝学的に発生学的に、奇形の確率は自然状態でも一定割合あると言われていきますから。

小若) 耳なしウサギが生まれる線量の閾値は1000mSvで、われわれ独自に、ウサギ小屋の横に土を検査して、1000mSvを軽く超えそうなことを確認しました。

採取した土のデータから、3月20日までさかのぼると、4号機の使用済み核燃料プールの4月12日のデータと一致する値になりました。

飼い主は、3月14日に顔が赤くはれて、1ヵ月半も治らなかったと言っていました。専門家に聞くと、放射能が顔についたので、放射能焼けというのだそうです。

文部科学省のデータを調べに調べてみましたが、1000mSvの閾値は軽く超えそうなこともわかりました。これだけ線量が強いと、耳なしウサギの原因は放射能という、われわれの説に反論できる人はいないでしょう。

A) 農薬では田圃への殺虫剤殺菌剤の大量空中散布で、小動物が死に絶えたような

ケースもありましたが、放射線ではそういうこともあるんですか。

小若) 放射線量次第です。物凄く高い場合は死に絶える。放射線量次第でさまざまな障害が出ます。遺伝的な被害は、世代交代を繰り返すと表面化するので、長い時間がかかります。

宮崎) では、ここでスピーカーを交代し、澤登さんお願いします。

澤登) 最初に、さきほどから話題になっている被爆許容量 100mSv の話に関連したことをお話しします。つい最近、J-wave (FM ラジオ) のジャム・ザ・ワールドという番組で放射線医学が専門の東大の中川恵一准教授の話を聞きました。それは、放射能にも閾値(しきいち)があり、被爆量が 100mSv 以上だと癌のリスクが高くなるが、それ以下については影響が良く分かっていない。そのため被爆によるリスクを直線的と見るのは科学的ではなく、哲学的である、というものでした。

これは、先ほど小若さんが紹介された、国際的な研究グループが認めている「被爆のリスクは、直線的、閾値なし」という事実と反しているわけで、これを聞いて驚きました。

私は、この 2 月に東京、3 月初めに仙台で、消費者庁主催の農薬のリスクマネジメントに関するセミナーにスピーカーとして参加し、他のスピーカーから類似した話を、つまり大半の農薬はあるところまでは健康に悪影響を及ぼさないが、一定以上になると(閾値を超えると)健康障害が出始める、という話を聞き、大きな疑問を抱いていました。農薬による健康への影響だって、人によって、その人が持っている体質などによって明らかに異なっているのに、被爆リスクについても同じような話が公然とされていることを知り、愕然としました。

限られた数字、データを根拠に、ここまでは問題ではありませんと言い切ってしまう科学者の非科学性、そういう研究者が増えていることを私は危惧しています。知的想像力を働かせ、命を脅かすかもしれない可能性があることに対しては、ノーという、予防原則の立場を取る勇気を持つことがいま科学者に求められているのではないのでしょうか。ラジオでは、さきほど話の出た広島や長崎のケースについても触れておられ、遺伝子の欠損についても関係が無かったと話されていました。

私は、有機農業をメインテーマにしている、活動しています。有機農業では、食の安心という問題がまず話題になりますが、その際に、ただ単に農薬をかける、かけないという問題だけでなく、長期的な視点に立って、将来に渡って影響が出る可能性があるものについては、はっきりノーという予防原則的な考え方が必要であることをきちんと伝えていきたいと思っています。

命を大切にできる社会を取り戻していくため、持続可能な社会をつくっていくためには、持続可能な農業が必要であり、食と農を通じて人と人をつなぎ、コミュニティを再構築していくためには、本来あるべき農業、すなわち有機農業が必要であると考えています。

そのためには、原発事故による放射能汚染の問題についても単に、生産の安心安全というだけでなく、これからの農業や地域のあり方、日本社会のあり方についてまで総論的に押さえて行く必要があると考えています。

宮崎) ご指摘の通り、同感です。持続可能な社会、持続可能な農業、そして有機農業ということですね。有機農業は、食と農を通じて人と人をつなぎ、コミュニティを作るためにも必要だと。澤登哲学ですね。

澤登) 福島へは、私も5月の連休のときに調査に入りました。私が会長代行を務めている有機農業学会というのは、有機農業そのものを研究するだけでなく有機農業の基本的な考え方や望ましい方法論を社会に提示していくことを目指しています。

その背景には、「有機農業が社会的に拡大することは、生命や環境への負荷が軽減されることであり、高く評価すべきことである」という考え方があるからです。これまで有機農業の発展・推進のために精力的に努力してきた有機農業者が、原発事故によって深刻な影響を受けている状況を憂慮して、何らかの行動を起すべきだということになり、調査に入ったんです。

もっと早い時点で声明文を出そうかという話もあったのですが、何はともあれ、現地に入ってその状況を見て、感じて、当事者の話を伺うことが先ではないかということで、現地へ行きました。

福島市から入り、相馬市、南相馬市を通過して飯館村・川俣町を抜けて二本松市、旧東和町へ行きました。計画的避難地域に指定された飯館村を初め、周囲の山はどこも本当にキレイでした。桜も咲いていて、山はパステルカラー一色、典型的な春の里山風景が広がっていました。

でも、そこには目に見えない放射線があるということを感じずにはいられませんでした。放射線量が高い地域では、そこで生活している人々がいるにも関わらず、外へ出ている人を見かけることはほとんどありませんでした。

これまで、自然と向き合いながら農業を行い、地域全体で生活を支えてきたのに、原発事故による放射能汚染のために、春になっても土を耕してはいけなるといわれている。人々はそのことに対して、大きな苦悩を抱えている、それは凄く深刻な問題です。そのことを痛感しました。

このような農業に対して、私達はどうやって応援していくことができるのか考えずにはいられません(このときの調査報告書は、日本有機農業学会のホームページで読むことができます)

風評被害は別にしても、米については今年の作付けを地域全体で取りやめることを早々と決めたところもありました。その後、私は5月末に大学で「福島を想うプロジェクト@恵泉」という集いを開いて、福島の有機農業者が生産した米や山芋、野菜を販売し、それをういたカレーを作り販売しました。

また、同時に農業者にも来ていただき、現地の状況を学生や地域の方々に、直接話してもらおう機会を設けました。有機農業者は、これまで地域資源の循環を基本に堆肥を作り、土を育て、健全な作物を作ってきたし、これからも地域資源を循環させて、農業を営んでいきたいと思っているはずで。

それなのに、その大切な地域資源が生み出されている山などすべてが汚染されているかもしれない。水を介して汚染が広がっている現実もある。地域資源の活用、循環を基本として有機農業をやってきたのに、その基本が根底から覆されてしまうかもしれない……。この人たちはこれからどうやっていくのだろうと思うと、暗然たる気持ちになりました。

とにかくいまはまず、どれくらい汚染されているか、実態を調べなければなりません。同じ地域でも場所によって汚染に差があるようです。実態調査をして、農民側、生産者自身がその現実を知り、何をすべきであるか明らかにしていかなければならないと思います。その辺のお手伝いがどう出来るかを有機農業学会の有志と地元とで話し合いを行っているところです。

その一方で、住居を他に移すという問題もあります。私が訪れた地域にも移った人がいましたが、農業生産の問題だけでなく、地域的なつながりの中で農的暮らしをしてきた人たちがその地を離れて新しく生活を始めるということの苦悩をどう見ていくか、ということです。

今回の、放射能汚染問題は、その中に暮らす人々にとって非常に厳しい状況になっています。私の知り合いの中にも今まで住んでいたところを離れて、農業をしている方がいます。行った先の地域での生活、残された地域の畑のことを考えると、どうのこうのと軽々には言えないです。

でも、将来のことを考えると、放射能の影響が大きい小さな子供や若いお母さんは絶対に守らなければなりません。ただ単に、福島農家を応援するためと称して、むやみに農産物を販売してはいけません。もし福島の農産物を販売するとすれば、線量を測定してその数値を明示して、販売すべきです。

その上で、中高年の人々、例えば60歳以上とかの人々は、原発社会をつくってきた責任も含めて、被爆リスクのある食品を食べることも覚悟しなければならないのかなと思います。

現実問題として汚染が著しいので、分かってくればくるほど、汚染された土地で農業をして、生活していかなければならない人々をどのように応援していくべきか、真剣に考える必要が出てくると思います。彼らを切り捨てるようなことは絶対あってはならないわけですから。

小若) その人たちをどう救済するかがまず問題ですね。

澤登) 放射線は見えないから、怯えながら暮らしているわけです。同じ福島県内であっても、ちょっと離れるだけで線量が大きく異なるようです。会津の方へ行けばまあまあ落ち着いているけれど、浜通りや中通りにかけてはマダラになっていることから、早く実態調査を行う必要があります。その結果を基に、どんな可能性があるか、一刻も早く対応策を検討することができるようにするために。

春になったら畑を耕し、さあ農作業をしようと思っていたら、3月に地震と原発事故でしょう。4月、5月は農家にとっては、種を播いたり、苗を植えたりする大事な時期なのに、種を播いちゃいけない、田圃に水を入れちゃいけないとなってしまった、その気持ちはどうだったかと考えると、想像を絶するものがあります。

先ほども話したように、5月末に大学で「福島を想うプロジェクト@恵泉」をやったときには現地の農家の人たちに実際に来てもらって、話を聞きましたが、話を聞くと現地を実際に見るのとは大きく違います。

若い女子大生を被爆の危険性が高い福島へ連れて行くことは出来ないのに、大学に来ていただいて、話を伺ったのですが、東京にいて、福島産は食べてはいけないと言って大騒ぎしている人たちに、福島の農業者の無念さや心の叫びを知って欲しいと思います。

宮崎) 20km圏内にも入ったんですか？

澤登) いいえ、外だけです。

宮崎) 澤登さんは放射線物理学とかの放射線の専門家ではないわけですが、農学者でいらして、そのお立場から想像してみて、調査された飯館村では、あるいは20km圏内のどのあたりなら農業は継続してできると感じられましたか？セシウムなどが相当蓄積しているわけですね、特に原発に近いところでは、何年か先に農業を再開

できる可能性があるでしょうか、あるいは10年先とか20年先とかでないとも再開できないでしょうか。その辺についてはどう感じていますか。

澤登) 私は相当難しいと思っています。農地は、耕さない、手を入れないとダメになるという問題もあります。もう一つは水源の問題。これが汚染されると、耕地に流れてくる。そういったことを考え合わせると、汚染が激しい地区は相当広範囲に及ぶでしょうし、農業の再開が厳しい地区は少なくないと思います。ただ、十把ひとからげには言えない。山一つ越えると汚染が少ないといったことがあるようですから。だから、早急に実態調査をしっかりとやる必要があります。

宮崎) 汚染の深刻な地域が何万ha、住民が何万世帯で何万人・何十万人に及ぶか分かりませんが、2、3年先に農業が再開できる見通しがあるというそんなに甘い状態ではないということですね。原発を離れて、三陸はどうかと見れば、街は壊滅しました。復興計画では、高台に住宅を造り、職場すなわち漁業などには平地に降りてきてやるという案が出ていますが、農業はそうはいきません。高台や平地とかに関係なくもう生産の場所たる農地を手放さなければならぬというところが相当でてる、ということでしょうか。

澤登) 三陸のように津波だけの被害の地域と、原発事故による放射能汚染が著しいところとで一番違うのは、津波だけの被害の場合には酷い状況はもう終わっているという点です。今なお海水が溜まっていて、抜けないところについては、わざわざ水田に戻す必要があるのかという問題もあると思います。地形も変わってしまっているし、もともと湿地に近いところを水田にしたわけだから、そこはもう諦めて違うところに水田を造るといった発想があってもいいでしょう。しかし、それは放射能汚染の問題がないところに限ります。放射能汚染の地域は全部が汚染されているだけでなく、いまだに事態が進行中であることに留意しないとダメです。一番の問題は、一刻も早く原発からの放射能漏れが止まることです。その上で、まき散らされた放射能をどうしていくのか、ということになります。しかし、これを取り除くことは不可能。畑の除染とか言っていますが、そんな簡単な話ではないですよ。

宮崎) 表土を10cm取り除いて客土してなんて言われていますが、それが出来るようなレベルとか規模の問題ではないと。

澤登) 下水処理場の汚泥からも放射性物質が出ています。だから放射線は、相当広範囲に拡散されている可能性があり、地下水からも出ているかもしれません。もう一つ、田中先生はもう放射能は飛んでないから安心などと言われているようですが、3月の水素爆発の際に、放出されたものが杉の葉っぱが何かにくっつき、すぐには吸収されない形になっている、あるいは土の中にセシウムがあったとしても、何かと結びついて吸収されないタイプになっている可能性があります。しかし、これを植物に土の中から吸収させるとずいぶん減る。それで考えられているのがヒマワリで、ヒマワリを栽培し、土壌中のセシウムを吸収させ、そのタネから油を搾り、その残渣も含めて東電に買ってもらうという形があります。

松下) それを燃やすんですか？

澤登) 燃やして灰にする。その残渣は火力発電で使い、灰は東電に処理してもらう。作業員は60歳以上の人たちにして。若い人が作業を通じて被爆することは避ける。そういうプランをどんどん推進していきたいですね。

宮崎) 下水処理場の問題ですが、そこらについては官僚はどういう発想をもっているのでしょうか。これからどうするかということですが、水道だから厚生行政になるの

かな。その汚泥を肥料にしようということだから、農水省も絡むわけですね。この問題、彼らはどうしようとしているのでしょうか？

小若) 畑へ入れる汚泥を 200Bq に規制したんです。下水処理場のは 8000Bq という基準です。食品は低くてもが 200Bq だから、これを下げれば、汚泥肥料ももう少し下げられるのだろうけれど。

澤登) 汚泥を大量に処理しようとするのは大変。畑はゴミ捨て場ではありませんから、基準値を下回っていけば、畑に入れても大丈夫などというのはもってのほかです。大切な農地を汚すわけにはいきません。責任はあくまで東電にあるのですから。

小若) それは、福島へ戻すしかない。東電が事故を起した以上、東電の責任で処理してもらおう。東電の敷地内へもっていくのが原則だ。それでも足りない分は、周辺数キロの農業ができなくなった地域へ東電の責任でもっていくということでしょう。

A) 東電の体質はみなさん知っての通り、ほんとに酷いようですね。でもトップが変わると、すぐ変わるという面もあるようで。

小若) 東電には、自分達で考えてきめ細かく対応する能力がないですね。

宮崎) 澤登さんが汚染の実態調査を、と訴えられた。その通りだと思いますね。で、その調査は行政がやるのかもしれないし、NPO などがやることになるかもしれない。でも基本は、国の責任において国が金を出して行うということでしょう。澤登さんは、農民がそれをやると主張されましたが、これはどういう意味でしょう？

澤登) 農民が主体的にそれを動かすことができるような仕組みが必要だと思います。被害を受けている当事者である農民が主体的に調査に関われるよう、そのような調査が出来る体制を作ることが大事だと思います。

宮崎) われわれの討論から政府に訴える事柄を取りまとめる必要がありますね。汚染調査の問題はその 1 つですね。さて、次に松下さんに発言していただきたいと思います。松下さんのお店では医食同源という考えに立って、さまざまな食品を扱っておられますが、そうしたビジネスの中で、原発事故をどう受け止めておられるか、松下さん、お願いします。

松下) 小若さんと澤登さんの生の情報を驚きながら聞いていました。一般の人たちはいろんな方法で情報を得ようとしています、私もそうです。でもなかなか的確な情報が得られないという悩みがあります。これが今度の原発事故での、私の真っ先の素朴な実感です。

わが社は、デュ・アン漢方スパという店舗を運営しています。お店は赤羽の JR の高架下であり、漢方薬局・漢方整体・カイロプラクティック・アロマトリートメント(植物療法)の複合店舗です。「一に養生、二に治療」を前提とした店作りを心がけています。

お客様は治療の目的で最初は来店されますが、どうして病気になってしまったのか？ どうしたら根本解決できるのか？ をお客様と一緒に考え、“養生”の大切さに気づいていただき、そのお客様により適した生活改善の指導を積極的にしています。それが店舗運営のコンセプトです。

養生の中でもやはり食養生は重要です。玄米菜食、無添加食材、厳選した塩・味噌・醤油・油などの調味料、そういった食品を扱っています。そして土曜日限定で有機野菜も販売しています。また、当「NPO 食と農」の関連団体である都市民の週末農業団体「土日農業研究会」の有機野菜も月に一度、最終日曜日に販売させていただいて

おります。

これらの有機野菜はともに茨城の筑波産なんです。今回の原発事故のあと一気に風評被害が広がったので、震災後1か月半ぐらい販売を中止していました。で、いまは販売再開しています。小若さんにお聞きしたいのですが、一時風評被害の出ていた茨城の野菜の安全評価についてはどうお考えですか？

小若) さきほど言ったように、福島産はやはり食べない方がいいですね。それは私の持論です。福島産以外では、次いで心配があるのは茨城産、そして栃木産、群馬産、宮城産、山形産などでしょう。

松下) そうですか。悩ましいです。茨城の筑波山麓にある「土日農業研究会」の農場のジャガイモは、安全性が十分なレベルで確認されていますので、問題ないと考えています。他のものも同様に多角的に安全性を確認していて、今後も問題ないと判断できるものを販売していくつもりです。

また震災後は、特に力を入れて根昆布を放射性ヨウ素対策として販売しています。そのことについてもご意見をお聞きしたいと思います。根昆布は以前から、ヨウ素を多く含む点に着目して取り扱っています。放射性ヨウ素が体内に入ってくる場合に備え、その予防的食品として意味づけているんです。

ところが震災後、一気に品切れになりました。なんとか確保して提供できていますが、とにかく良く売れます。

もう一つ、小若さんの本でも指摘されているミネラルですが、私の薬局ではサンゴのミネラルを積極的に勧めています。これにもしっかりした裏付けがあることが分かり、安心できました。今後も、販売する商品についてははっきりした根拠があって、自分が納得でき、安心できるものをお客様に提供していきたいと思えます。

ただ、私どもは食料品屋ではなく、あくまでも漢方薬局だと自覚しています。薬局でのお客様はほとんどが慢性病であり、原因のはっきりしない辛い症状をかかえ、何とかならないかと相談に見えます。

原発事故後は、自律神経が不安定になり、会社に行けなくなったとか、眠れない、目まい、立ちくらみ、不安感、うつ症状などの相談件数が凄く多くなりました。以前、同じような症状で漢方を服用され、改善されて来店されなくなっていたお客様が、また具合が悪くなったと言って来られているケースも増えています。こうした現象を見ると、社会全体が不安の渦の中にあるんだなと実感します。

小若) この根昆布の粉末とミネラルはいいですよ。

松下) 私は毎朝、玄米の粉、ハト麦の粉、ミネラルを混ぜて、豆乳とバナナを加えてミキサーにかけて飲んでます。これが、私の朝食になっています。根昆布の粉末は震災後から追加しています。

宮崎) 小若さんが提唱しているのとぴったり。やっぱりボクがお付き合いしている目利きの薬剤師でいらっしゃる。

小若) ボクらは昨年出しましたが、『食事で分かる新型栄養失調』という本に、煮干の粉、アゴの粉、昆布粉を混ぜて、食事や汁物に入れて食べようとしています。今日の討論会でもし弁当が出てきたら、これを降りかけて食べようと思っていました。サンドイッチなので、液体ダシにします。

松下) このままいただければいいんですか？

小若) かけるだけです。

澤登) 味噌汁はうちも煮干しのダシです。野菜を煮るときも煮干しを入れています。

高1と小5、二人とも男ですが、小さいときから煮干しを食べています。これは、微粉末だからいいですね。子供たちでもそのまま食べられますね。

宮崎) 煮干しは女性には特にいいんでしょう、骨そしょう症とかに。早稲田大学理工学部の物理学の小林寛先生が生前、口癖のように言うておられたことがあります。カルシウム不足にならないようにしないとイケないと。カルシウムを吸収させるのにはビタミンDが必要なので、煮干しをかじりながら、日光浴をするのが一番だと。日光浴をすると、皮下でビタミンDが作られますから。だから、女性は特にそれを実践しなさいと。いまその話を思い出しました。松下さんの話に戻りたいのですが、「医食同源出前講座」というか、そんな啓蒙をする活動をしていますよね。その話を聞かせてください。

松下) 講座をいくつかもっています。漢方の講座とか。他社の社員研修も担当させていただいています。食養生に関する講座としては、ウェルネス・イーティング (Wellness Eating) があります。ウェルネスという概念があって、自分の仕事、自分の人生は自分で責任をもって、より輝く人生を送ろうというものです。ウェルネスとは、造語です。アメリカで提唱されたもので、最近ではブーム的にウェルネスという名前の付いた施設なども出てきています。栄養、運動、休養という切り口で、自分の生活を見つめなおし、改善目標を立て、実践していきます。私はウェルネスの考え方が大好きで、ウェルネスと養生はイコールだと思っています。

病気になるから食物に気をつけるとか、休養しようとか、軽い運動をしようというのは、本来の養生の考え方とは違います。本来の養生の意味は、「生」を「養う」です。生ですから、命の力、生命です。さらに一日一日の生活ということです。生命の力を養い、日々の生活を養うということが漢方で言う養生です。毎日毎日の積み重ねで、いまがあるわけですから、その意味で良くも悪くも、これからの一日一日の積み重ねが大事ということであり、すべてが自己責任だということにつながります。

今日の討論でもいま実感しているのは、生活の組み立てはすべて自分の責任でやらなければならないんだけど、自分の責任の範囲を超えたものが今回の事故なのだという。痛切にそのことを感じます。それで、いまの私の責任という役割は、正しい情報を集めて、それを広めていくことだと改めて決意しています。

話を戻しますが、ウェルネス・イーティングの講座では、「一物全体(いちもつぜんたい)」という食の基本原則を第一にご紹介しています。一物全体とは、1つのものを丸ごといただくことが人間にとって最適であるという教えです。丸ごと全体をいただくということは、生きてい^{いのち}る生命 生命^{いのち}のエネルギーをいただくことです。

一物全体の代表は、玄米(発芽玄米)です。講座の中でも、お客様にも主食の大切さについて思いをこめて伝えていきます。お店では、開業当時から発芽玄米を勧めています。そして、いまやっと定着してきました。

講座のほかに、デュアン太極拳クラブとかも作って、お客様と太極拳をやったり、山クラブをつくって山歩きをしています。

実は、私が薬だけではダメだと気付いたのは、というより当たり前のことなんでしょうが、ウチの女房が18年前に、36歳のときクモ膜下出血で倒れたんです。重篤でしたが、いまは幸いにも少しの障害が残るまでに回復したという私にとっての重大事件があったんです。彼女も薬剤師をやっていて健康には人一倍気をつけていたのに、な

んでウチの女房が・・・と考え込んでしまいました。

そのころから私は社員研修をやっている、研修ではポストハーベストの話をしたり、養殖の魚の背骨が曲がったビデオなんかも見せていました。そして薬剤師の相談員を目指す人たちへ、予防、未病が一番大事だと訴えていました。

予防、未病が一番大事ということは普段の生活が一番大事だということで、「養生」を一番に打ち出すのが自分の仕事だなと思いつめたんです。

そのころは会社員でした。その後 2004 年から、いまの会社「デュ・アン」を始めました。そして、今度の原発事故が起きたという経過です。

澤登) 長崎、広島で被爆した人たちに味噌が有効だったといわれていますね。おそらくミネラル分がそのポイントだったと思われます。人が健康でいるためにはミネラル分も、その他の栄養分も正しく摂ることで、免疫力の強い身体を作っておくことが大事ですね。煮干しを大事にしていることはさきほど述べましたが、我が家では子供たちが小さいときからそれは常食にしています。放射能汚染のない煮干しを食べましょう。これをもう一度強調したいですね。

松下) 確かにミネラルは重要なポイントだと思います。私は主食が一番、そして玄米食が一番と考えていますが、玄米食を続けている人と、そこまでは手が届かないという人とは、はっきりと違いが出てきますね。データを取っているわけではないですが、明らかな違いが出てくるんです。

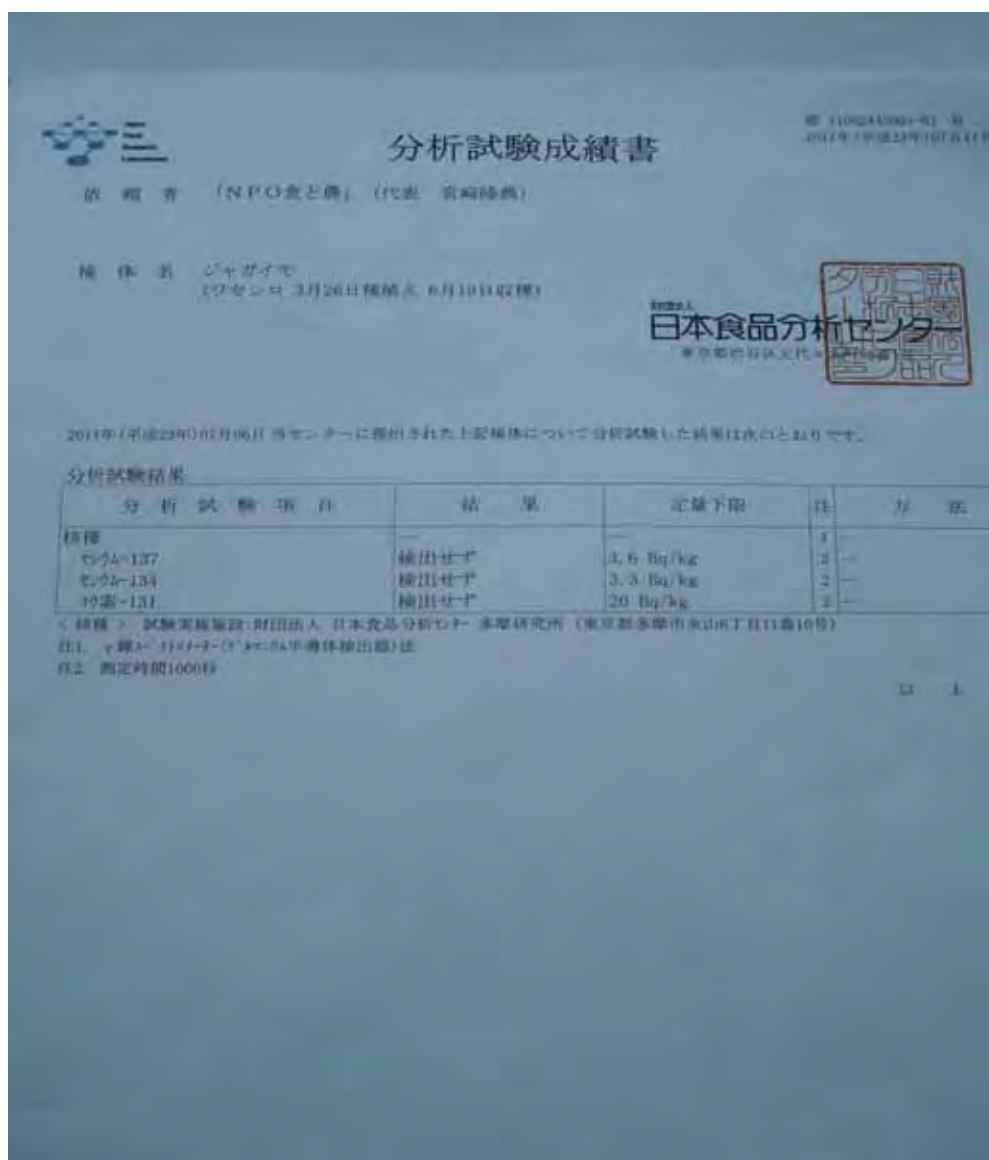
玄米食を続けていただくためには、まず発芽玄米と白米を半分ずつ混ぜて炊いてもらいます。この配合はとても美味しいです。なので、ほとんどの人が継続できます。初めは手元にある白米を使ってもらいますが、次第に有機の白米や五分搗き米に切り替えて行くんです。

宮崎) ミネラルの問題は古くから、化学肥料の問題もあって、例えばハウレンソウのカルシウム分が標準値より年々下がる傾向にあるといった指摘がありましたね。放射能の問題が出てきて、野菜を調理する際、ハウレンソウなどの葉物は葉をよく洗って放射性物質を洗い落とす、根菜類は皮をよく剥くといわれて、悩ましい問題が出てきました。もともとニンジンなんかは皮を剥くな、そこに栄養素があるから、といわれていたのに。いわゆるトレードオフの問題。あっちを立てればこっちが立たないという問題です。それで、ボクは自分の NPO 筑波農場でつくっているジャガイモですが、念のため、肉ジャガをつくと、肉とジャガイモだけ食べて、汁は食べないのがいいのかな、なんて悩んでいます。

小若) それはまったく違う。もったいないじゃない。現代人にはミネラルが不足しているし。澤登さんみたいに自給自足で、かつ煮干しを食っている人はいまは少ない。普通、煮干しなんか使わなくて、ダシをポンと入れるだけでしょ。そのダシの部分で微量ミネラルが取れなくなっている。外食が多いと、料理人がいない店では水煮のものに味付けて出すだけ。だからミネラルが足りない人が、ミネラル抜いた食事しかとっていないわけです。

宮崎) ジャガイモの放射能汚染ですが、農産物生産者でもある「NPO 食と農」ではこの前、収穫したジャガイモの放射線量の測定を「財団法人日本食品分析センター」に依頼したんです。それというのも、今年、ボクらはジャガイモ、サツマイモ、サトイモの3種の芋を合計 1000 kg ばかり被災地支援として贈ろうというプランを立てたんです。種芋や苗を植える時期がいずれも 3・11 の後でしたから。3種で例年の倍以上 300 坪ばかり植えましたかね。

で、先日ジャガイモの本格収穫に備えて、検査用に掘って、泥をよく洗って規定の量 2kg を分析センターに送りました。明日、その結果が出ることになっています。ジャガイモの食品衛生法上の暫定基準は 500Bq ですから、その基準を下回るのは間違いなく、基準値より「0」が 2 つ少ない数値以内に収まるだろうと想像しています。検査はヨウ素とセシウムについて行われ、ヨウ素は収穫日を書いておけば、収穫時点の放射線量を推定したものを出す、つまりヨウ素は放射能の半減期が 8 日であることを踏まえて数値を出す、その速報値を 5 日間で出す、正式な証明書を 10 日後に出すということでした。速報値が今日に間に合えば良かったんですが、明日なんです。(検査結果は、ヨウ素もセシウムもともに「検出せず」。検出限界値はともに 5 Bq。写真下を参照)



小若) すいぶん時間がかかるんですね。

宮崎) 検査依頼が混んでいるということですね。で、料金は 21000 円。もっと安く検査できる体制が必要ですね。でも、食料支援をしようというからには、多少お金はかかってもそれが NPO の良心だと考えています。

小若) 検査の内容によってはもっとも高い。ジャガイモや大根などの芋類や根菜類の問題は、セシウムが大根の中にどれだけ入ってくるかですね。空から来る放射性物質の問題は福島を除いて、茨城はもうほぼないはずです。

宮崎) では、次に私の発言ということで。原発事故があって、消費者の食品の安全性に対する考え方が変わりましたね。以前は農薬と添加物の問題が中心でしたが、そこから急転回して。先日、静岡県三島市から放射能の問題も含めて「食の安全」というテーマで講演をして欲しいという依頼がありまして、放射能については素人ですが、ということで引き受けました。

さあ大変だ、とネットからこれはという資料をかき集めて“このレジュメ”を作りました。そして、ポイントを絞って話したことの1つは、閾値の問題でした。農薬も食品添加物も生命体への影響という点で見ると、閾値、つまり最大無作用量がありますね。ヒトに影響が出る・出ないのギリギリの量というその量をベースに、食品中の農薬や添加物の残留基準が決められる。その基準値の食品なら、それを毎日一生涯食べ続けても問題ないというわけですよ。

一般論ですが、放射能汚染食品の問題もその基本的な考え方は一緒ですよ。小若さんの資料で見ると、野菜類・穀類は500Bq/kg、飲料水・乳製品は200Bq/kgが基準なので、それらを毎日1kg、一生涯食べ続けても問題ないと解釈しているわけですよ。先ほどは「閾値」はないと考えるべし、という意見が出されましたが、講演ではボクは閾値の考え方に立って話しました。

シーベルト換算もその資料に出ていて、乳幼児の場合はベクレル シーベルトの換算式は違ふとあります。で、その換算の話もしながら、基準値はあくまで基準値であると、しかし、なるべく摂取しない方が「安心安全」であることは間違いないと、閾値に立ちつつ、そう話しました。

質問が出ました。自分は玄米食の推奨活動をしているが、玄米についてはどのように食べればいいのか、というものでした。私は、玄米の胚芽の部分や糠の部分に一番放射性物質が蓄積されるとされていて、したがって基準値内の玄米で数値が高いものについては玄米で食べるのではなく、白米にして食べれば安全度は高まると一般的には言われています、と答えておきました。暫定基準値である500Bq以下の玄米なら、基準値の基本的な考え方からすると「安全です、どうぞ安心して食べましょう」と言えはいいのでしょうか。基準値内の玄米でも、最後は消費者個々の判断で、ということになりますから。

2つ目のポイントは、植物はどうやって放射性物質を植物体内に取り込むか、という問題です。ある農業団体が作った『根の国』という表題のビデオ、いまはDVDになっていますが、それを見てもらったんです。その農業団体は有機農業を目指す全国縦断の生産者団体で、初め運動体からスタートしいまは株式会社になっていて傘下にざっと1000人ばかりの生産者を抱えています。その生産者たちが中心になって、2000年に制定された「有機JAS法」に基づいて有機農産物を認定する第三者機関をNPO組織として作っているんですね。そのNPOの理事でお米の生産者でもある秋田の井出さんという農家の人ともう20年以上の付き合いがあるんですが、さきほど松下さんの話に出てきた薬店で販売しているという「発芽玄米」の生産者の井出さんは、私の知人の井出さんでして、カタログの写真を見てびっくりしました。

松下) えっ、そうですか。びっくりです。奇遇ですね。

宮崎) 話はそれでした。その農業者団体が、共通の堆肥を作るのに、もう亡くなられましたけれど、京都大学の土壌微生物学の小林達治助教授の指導を仰いでいた関係から、小林先生に頼んで、土壌中の植物の根と微生物の共生状態を電子顕微鏡を使って撮影したのが、『根の国』というビデオ映画でした。これが良くできているんです。小林先生は、ドイツの化学者リービッヒの無機理論のみによって根が窒素・リン・カリなどを吸収しているに非ず、有機の状態でも吸収していて、それを手助けしているのが微生物である、ということはこのビデオでもリアルに映して見せているんです。

いや、何を言いたいかです。つまり放射性物質も微粒子なわけですね。福島原発から飛散して土壌中に積もり少しずつ沈下していくといわれる放射性物資は、地中の植物の根から、微粒子のまま植物の体内に取り込まれるわけです。ビデオには根毛の先端から微細な有機物が体内に取り込まれている様子が映されていますが、講演では、こんな風に放射性物質も取り込まれるんです、と話しました。参加者は映像を食い入るように見ていました。

放射能の素人ですが、この講演をしてよかったと思ったのは、放射能は目に見えないので、漠然とした不安や恐怖心があっても、人にはリアルに理解しづらい面があるのが参加者の反応から分かったからです。

この前、新聞に出ていましたが、一昔前まで小中学校では放射能について教えていたが、いつのころからか教えなくなったこと、教育のノウハウの蓄積がなくなった中でそれを復活させなければならなくなり、現場の教師が困っていることが書かれていました。ゆとり教育からの脱却～詰め込み教育への回帰という中で、放射能をどう教えるか、カリキュラムにどう位置づけるか、食育にどう盛り込むかといった課題が急に出てきて、現場も文科省も大変ですが、やらなければなりませんね。子供だけでなく、大人も学ばなければなりません。

今日の討論を企画したNPO食と農、としての目的を言えば、そういう食育のあり方を含めて、放射能汚染問題に直面した食と農の、今後の社会的な運動のあり方を探ることなわけです。その意味で、みなさんの発言からそのヒントが得られるのではと期待しているんです。

さて、発言が一回りしましたが、残り時間で落穂拾いをしながら、重要なテーマを再度俎上に上げて、問題の掘り下げをしていきたいと思います。

暫定基準の見直しが政府でもテーマになっているようですが、この問題はをどう見ればいいのかね。

小若) いまの暫定基準は現地で被害を受けた生活者、農家がいきなり疎開しないでいいという基準。これから暫定基準の引き下げを検討しているけれど、集団遺伝学をやっている人が入っていないので、消費者を守る基準にはならないでしょう。

松下) 千葉県柏市や流山市のホットスポットの問題が心配。それと福島ですが、全部ダメだと言われると、会津などの県西部の農産物もそうなのかと思ってしまいます。こころ辺のことはどう考えたらいいでしょうか。

小若) 私は福島については東部、西部と分けて考えたうえで、汚染の濃度の差はあるでしょうから、ホットスポットを加味して考えるのがいいと思います。

私自身は、危険は危険と対処した方がいいという考え方に立っています。私どものこだわり商品を扱う会社では、静岡のお茶と、山梨の桃については、放射能が出る前に取り扱わないことをスパッと決めました。早めに言ってあげないと生産者が作ってしまい迷惑をかけることになりますから。そして、原発事故の前のお茶を1年半分買

い上げました。同じように、煮干しについては3年分買った。2階の床が落ちるんじゃないかというほどストックしました。買い占めというと聞えは悪いですが、事業の自衛行動です。

澤登) 汚染の実態を迅速に調査し、その結果を基に、畑の状況によって、今後の方針や、取引について決める。それが信頼関係だと思えます。今回の事故は、基本的に東電の責任ではあるのですが、持続的な農業、日本の農業を守っていくためには、覚悟して生産者と付き合っていくことが大事だと思えます。そこで、顔の見える関係が出てくる。だから、汚染状況から考えて生産者がもうダメだと判断したら、生産者が安心して作れるところへ生産地を移すしかないですね。

小若) 日本じゅうに余っている農地はいくらでもあります。政府が汚染された耕地を3・11前の価格で買い上げて、休業補償をして、空いたところに移りやすくする対応は当たり前の話でしょう。

宮崎) 外へ出て行って新たな土地で農業を始めるのは容易なことではない。そこまでドラスティックな判断をするしかないのかもしれないけれど、農家自身の判断を大事にしないと。地域を挙げてとなとなおさらです。さっきも出ましたが、農村という共同体をどうするかという側面がありますからね。

澤登) 家族が離れ離れで生活するというパターンが現実起きてきていますよね。小さい子供をもつ若夫婦は被災地から出て、お年寄り夫婦は家に残るといようなケースをどう受け止めるか。家族がバラバラに暮らさなければならないというのはやはり大きな問題です。

小若) 事故が起きてしまった。厳しいことがいっぱい起きたけれど、仕方がないと意を決して、前に進むしかないですよ。

澤登) そこをどうするかですね。起きてしまったことにどう対処するかという話と、そういう社会を作ってきた人たちがもう同じ過ちは繰り返さないような社会を作っていくという話とをうまく噛みあわせて、ふたつのことが同時並行で進むようにしていけないと。

小若) 家族で農業をするケースでは、お年寄りだけで住む、そして若い人は他所へ移る、一方で汚染された農地は一度政府に買い上げさせる、ボクはこれしかないと思っています。特に子供や若い女性に何かあったらと考えると、障害が出るかもしれない農作物を作って売るといのは犯罪に等しい。悪いけれど、子供と若い人、それとお年寄りの二つは分けて考えるしかないですね。

澤登) 例えば、双葉町や大熊町といった非常に汚染が甚だしいところはいたしかたないでしょうが、もう一方で、農業ってその気候風土の上に成り立っているという問題があって、長年農業を行ってきた方であっても、新しい土地、新しい気候風土で一からやり直すことは非常に大変なことだと思えます。

話は飛びますが、住宅のオール電化とか調理器具のIH化など家庭でのエネルギーの問題がいろいろ言われていますが、それらは人工的なもの、つまり人がコントロールできるものです。しかし、農業は気候風土や気象と不離一体です、米は1年1作です、果物は5年もそれ以上も経てようやく生産が出来るものもある、といった具合ですから。

松下) 先ほどもお話ししましたが、うちの薬局では根昆布などの海産物を販売しています。どういう影響が出ているのか、また今後、海産物はどうなるのか心配です。

小若) 爆発して出た放射性物質の過半は海に落ちています。原発敷地の地表から下

へ抜けたものも、じゃんじゃん地下水から海へ流れ出ています。いま現在、放射性物質の新たな飛散は、福島を除いて、地上に関してはほとんど問題がなくなっています。農産物の危険は少なくなっていくと言えます。

しかし、海産物はこれからです。コウナゴから 14400Bq の線量が検出されて以降、高い線量のもので出ていない。これって一体何なのか。ボクは出そうなものを測らなくなったからと見ています。出てくるデータを見ると、出そうなやつを測ってないことが明白です。だから、高い値が出てないということですよね。消費者はみんな水産物を恐る恐る食ってますが、私たちは用心して制限しています。

この前取材に行ったときのことで。事故前だったら「いわき寿司」へ入って、好きなものを食べてました。でも、今度は、「かつば寿司」へ入って、魚については鮮魚モノや止めて、冷凍モノが安全だからと、わざわざまずい冷凍物を食う。でもあと 1 年も経ったら、かつば寿司も危なくなるでしょう。

松下) 冷凍モノは輸入品だから安全というわけですね。

小若) 遠くまで行ってわざわざ「かつば寿司」でもないけれど、やっぱりそっちへ行く。夜もよく分からない店へ行くと何を食わされるか分からないので、コンビニに行って埼玉県産の弁当を買ってくる。そして、わが方で扱っているこのダシを入れて食うということになります。

それはともかく、海はもうムチャクチャに汚染が広がっているのは間違いありません。放射性物質では一番怖いストロンチウムが出ています。ストロンチウムは重いから、上にはあまり飛んでいなくて、地上では近くの農地などで出ている。20km 圏外にはストロンチウムはありません。しかし、海水中に行くと、一番底にいる魚と貝類、エビやカニ類、昆布などの海草がすでに汚染されているはずですよ。

海産物には特別な問題があります。例えば貝類ですが、実を食ったあとの貝殻をつぶして鶏の餌にしますね。鶏が食って次に糞が出て、それが肥料になり、日本のどこの畑にも撒かれる可能性があります。ストロンチウムが広範囲にバラ撒かれることになる。そしてストロンチウムが、北海道や九州で検出されるようになれば、日本農業は終わりですね。

ストロンチウムは、白血病とか骨ガンをつくります。白血病は出るのが早くて、ピークは 3、4 年後とされています。

宮崎) 取り込んだら、100%ガンになるということではないということも頭に入れておくことでしょねえ。

小若) もちろん 100%ということではありません。それでこの前、農水省の総括審議官のところへ行ってこの話をしたら、「小若さん、基準以下だからね。ボクたちは福島の農産物を応援しているんですよ」と同意できないと言うんです。

その後、2 分ほどですが篠原孝農水副大臣に、貝や海藻などのストロンチウムを畑に戻すと、日本農業がつぶれるので何とかしてほしいと陳情しました。もちろん「わかった」という返事でした。

澤登、松下) 小若さん、さすがのアクションですね。

小若) 貝の問題のほかコンブもあります。コンブは、例えば北海道へもって行って豚に食わしたりしています。

宮崎) 野菜のミネラル補充のための液体資材にもなっている。

小若) 汚染されたものが農業資材や堆肥としてあちこちで使われたら、ストロンチウム禍が広がることになります。

宮崎) 篠原さんの発言をテレビで聞いていたら、彼は、デリバリーの問題があつて堆肥は地域内でしか移動しないので、そう心配はないと言っていた。福島のは北海道へはもっていかないと。でも、小若さんの話のようなケースがありうるし、海流に乗ってストロンチウムがあちこちの海域・海岸へ流れていくことはあるわけでしょう。篠原さんの話はそのままは聞けないですね。

小若) ネットで売っているわけだから。ただ、汚泥肥料に関しては、県外には出ないことになっています。地域内の汚染の高いところのものをより低いところへもっていけばいい。

宮崎) それも問題だけれど、流通に関しては法律が何かで規制されている？

小若) 通知が出されています。

宮崎) ストロンチウムに関する申し入れはグッドでした。海産物の汚染調査も水産庁がやるようにわれわれも何かアクションを起さないといけませんね。

澤登) 役人はアイデアが湧かないのでしょうか？ しっかりやって欲しい。もっと積極的になってもらわないと。

小若) わがほうでは「日本の農地を放射能から守る会」というのを作ることを決めました。会長は全国農団労の元委員長・岡田さんをトップに据えて、1年間の予算も確保しました。放射能となってますが、ストロンチウムももちろん含みます。

宮崎) その会は農地を守るとなっているけれど、海も含めないと。あれもこれもやれることをやらないと。

澤登) 有機農業学会とも協同できるかもしれませんね。有機農業学会では、先ほどお話しした福島の調査報告書をホームページに掲載しています。

松下) 福島の肉牛から基準値を大きく越えるセシウムが検出されたのには驚きました。何なんですかね、どこかでチェックされてしかるべきなのに、いくつものチェックポイントをすり抜けるというのは。

宮崎) 暫定基準を引き下げようという話がでているときですからね。信じられないミスです。

澤登) 外の餌料を食べさせたという情報があります。地下水の汚染もあったのかもかもしれませんね。ないことを祈っていますが。

宮崎) さて、最後に、放射能汚染食品の時代をしばらく生きていくわれわれにとって、日常的に「食」にどう気をつけていくべきか、重複するかもしれませんが、最後のまとめの発言をお願いします。「食のここに気をつけよう」ということで。

小若) 3つ挙げましょう。1つは「食を守る」ということで「同族元素で放射能を取り入れないようにしよう」。2つは「健康を守る」ということで「トロロ昆布で放射性ヨウ素を防ごう」。3つは「水を守る」ということで「放射性物質を中空糸膜&活性炭で除去しよう」。

1つ目は、こういうことです。セシウムは体内には極く微量しか存在していない元素ですが、全身に分布しています。この内部被曝を防ぐ方法としては、カリウムが同族元素なので、放射能で汚染されていない食品からカリウムを多く取れば、濃度が薄められたのと同じようになるので、放射性セシウムの取り込み量を減らすことができます。

カリウムの多い食品は黒砂糖やメープルシロップなどです。スキムミルクはカルシウムが多いので、ストロンチウム対策になります。

2つ目について。放射性ヨウ素は、体内に入ると喉の甲状腺に蓄積されると言われ、

その予防策として、1つ目と同じ理由で、ヨウ素を多く含んだ食品を食べると良いとされます。その効果に疑問を唱える向きもありますが、有効だとする専門家の意見に拠って、私達はヨウ素を断然多く含んでいる「トロロ昆布」の摂取を勧めています。普段から食べておくことより効果的です。

3つ目について。家庭の蛇口に取り付けられる浄水器で、中空糸膜のものや活性炭のものでも放射性物質はほぼ100%除去できるので、心配な人は取り付けると良いでしょう。

澤登)先ほどもお話ししましたが、長崎、広島で原爆によって被爆した人たちに味噌が有効だったといわれていることから、ミネラル分がそのポイントになると思います。人が健康であるためにはミネラル分も、その他の栄養分も正しく摂ることで、免疫力の強い身体を作っておくことが大事ですね。煮干しを大事にしているのはさきほど述べましたが、我が家では子供たちが小さいときからそれは常食にしています。放射能汚染のない煮干しを食べましょう。これを最後にもう一度強調したいと思います。

松下)放射能対策のひとつとして、玄米食の重要性、ミネラル、根昆布などの有効性を確認でき、今までお客様にアドバイスしていたことに自信を深めることができました。今後は、現状の食養生にとどまることなく、会社全体で研鑽を積み重ね、より健康回復、維持・増進に役立つ食材の提案・提供をして行こうと決意しました。

宮崎)沢山の重要な問題の指摘があり、意見交換をし、認識を深めることができました。行政にモノをいうべきこと、アクションを起すべきテーマもはっきりさせることができました。今日はまことにありがとうございました。(了)